

## 「2021 チュラロンコーン大学スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学経営管理教育学部・M2年 上河 力

チュラロンコーン大学のスプリング派遣プログラムは言語や文化を学んだり、現地の学生と交流したりと、学問に特化した内容ではなく、大学間のコミュニケーションを重視した年次プログラムでした。過去には京都大学の学生がバンコクのチュラロンコーン大学キャンパスを訪れて開催されていましたが、今年度は新型コロナウイルスの影響による入国規制の為に渡航ができず、zoom アプリを利用したオンラインでのプログラム開催でした。

参加者は全員がタイ語の初心者だったので、派遣参加前には京都大学が提供した語学入門クラスに全員で参加したり、図書館でタイの歴史や経済データを調べました。タイに関しては観光国の印象が強かったのですが、そのことが経済データからも読み取れました。タイ観光・スポーツ省の発表によると、新型コロナウイルス前の2019年にタイを訪れたインバウンド観光客数は3,980万人と日本を上回っています。訪タイ観光客から得る観光収益を見ると、タイは日本のUSD 411.15億の1.5倍以上となるUSD 630.42億で、アジア圏のトップであり、世界的に見ても、米国、スペイン、フランスに次いで4位に位置しています。国家経済社会開発庁の発表ではGDP全体の20%近くが観光関連の事業から成り立っており、政府は2030年までに30%まで引き上げることを計画しています。2週間に渡ってチュラロンコーン大学の先生や学生と日々接していると、どうしてタイがアジアをリードする観光立国なのかが見えてきました。温暖な気候と食文化だけでなく、タイ人の「マイペンライ」な気質、過去に一度もコロニアル化されることなく築き上げられた独自の風習や伝統工芸、自分と異なる人を排除するのではなく受け入れるダイバーシティな社会など、旅行者を魅力するヒトと文化的要素が豊富です。

また今回の派遣プログラムは社会問題を他人事と思わず、自分で何ができるかを考える貴重な機会でした。昨年の夏季からバンコクでは反体制デモが続いています。現軍事政権の非民主的な政策に不満を持ち、王室財産の見直しや王室崇拜教育の廃止を求める社会運動がチュラロンコーン大学やタマサート大学の学生をリードに広がっています。王室批判をタブーと考える親世代とは意見が一致しないこともあるようです。京都大学での派遣参加前のミーティングでは、政治的な発言や王室に関する会話は避けたほうが良いとのアドバイスを伺っていましたが、タイの先生方や学生はデモ活動に関して自らが解説され、我々にも意見を求められました。空気を読み、協調性を重んじる日本人らしい風儀からきているのでしょうか、日本に暮らしていると皇室や政治のことを公の場で発言する機会がありません。そのため意見交換の時間では上手く発言できませんでした。自分と違う意見を支持する人たちと言いついたくない、そこから関係を壊したくないという思いと同時に、環境や社会の課題を可視化し改善していくには、我々各々が当事者意識、ステークホルダーとしての課題認識を持つことが求められます。今回の派遣参加を通じて、社会の課題に対して問題意識を持つことの価値、どうして(why)と問い、何をすべきか(what)を考えるうえでの対話による意見交換の意義を改めて認識できました。